早く逝きし俳人たち—人は何故詠おうとするのか

樽見博

１，自己紹介

只今紹介いただきました樽見博です。

春先に、この講演を依頼された時、即答でお引き受けしました。今回のテーマ「早く逝きし俳人たち」と題した連載を参加しています俳句同人誌「鬣」に３年ほど続けているのですが、今秋それが終わり纏める必要があったのでグッドタイミングだったことと、私の仕事の師匠である八木福次郎の墓が西明石にありまして、久しぶりに墓参りが出来るなと思ったのです。私は古書の世界でならともかく、俳句界では無名で力もないのですが、古書的な視点から俳句を見るということなら、幾分かは参考になるお話もできるかなと思っています。今回のサブタイトル「人は何故詠おうとするのか」という、大胆なテーマですが、講演の依頼を受けて、改めて 12 名の早世俳人たちを思い返すと、自然に浮かんできた言葉でした。どこまでこの課題に迫れるかわかりませんが、どうかしばらくお付き合い頂ければと思います。

２，「日本古書通信」と古書業界

私は、神保町古書街に隣接するところで、「日本古書通信」という古書趣味の雑誌の編集をしております。比較的最近の号を皆さんに一部ずつ配布させて頂きました。「日本古書通信」は、昭和 9 年に明石出身の八木敏夫が創刊しました。神戸育英商業を出て、当時新刊書を扱っていた神戸の福音舎に入社しましたが、折から創刊された岩波文庫を見て新刊書の将来に不安を覚えたようです。高額な専門書が文庫化されて売れなくなると感じた。そこで当時東大を卒業して古書業界に飛び込み、頭角を現していた反町茂雄氏に、古書業界に入りたいと相談の手紙を出しました。この二人の出会いはドラマをみるようで面白いのですが、長くなるので触れません。まあそんなことで神戸とは縁があります。先の阪神淡路大震災の折も、２週間後に神戸古書業界の取材と見舞いを兼ねて神戸に来ました。40 歳の時でしたが初めての神戸でした。西宮から三宮までタクシーを利用しましたが、その時見た光景は今も鮮明に記憶しています。その後も２度神戸に来ていますが、外側から見る限り見事な復興を遂げられています。東日本大震災の被災地にも何度か足を運んでいますが、全然違います。ただ、神戸の地震が古書業界に与えた影響は甚大でした。古本屋にとってお客さんが蔵書を時間をかけて形成してくれることが大切なのですが、災害時にはその蔵書が危険なものになりかねず、またコンピューターとインターネットの普及で蔵書をもつステータスが薄れてしまった面があるのです。

３，古書業界の使命

今回取り上げる「早く逝きし俳人たち」12 名は、病や戦争によって、己を時間をかけて磨き上げていくことが叶わなかった若者たちです。「己」とはその人を形作る仕事であり家族です。生活とも人生とも言えるかと思います。その生活の中での感動を表現するものが、彼らが選んだ俳句です。俳句を選んだ時からその人の俳句的人生が始まる。表現の形は様々ですが、生活と俳句は不可分です。彼らは直面する死の恐怖の中でも希望を俳句に託し作品を残した。その作品は優れ、所属した俳句雑誌の発展にも貢献した。でも俳句修業も死によって断たれ、戦後の混乱した世相もあるし、時間の経過と共に忘れられてしまう。もっとも、彼らだけが特別不運なのではなく、俳人も含め殆どの人は忘れられていくのですが。

その中で、時々私のような古い俳句雑誌が好きな者が出てきて、彼らの作品や早世を知ることになる。

書籍や雑誌は人の命よりはるかに長く存続していきます。

本日、「ホトトギス」と「馬酔木」の戦前最盛期と終戦前後の号、それと改造社の商業誌「俳句研究」の「支那事変三千句」と「大東亜戦争俳句集」を展示しました。その雑誌の厚さの差は歴然です。物資不足と思想統制が影響しています。ただ注意すべきことは、雑誌の厚さの差が、人々の俳句活動の消長をそのまま現している訳ではないことです。もちろん、戦争が外地での出来事でなく、空襲など戦争が庶民の生活に直接身近なものになるにつれ、人々の生活から俳句を詠む余裕がなくなったのも事実です。しかしそんな中でも、俳句の歴史を絶やさぬように努力し続けた人々がいた。雑誌が薄くなったことに驚くのではなく、その懸命の努力の証としてこの薄い雑誌を見ることが出来ると思います。後で詳しく触れると思いますが、誓子の『激浪』や、加藤楸邨の『火の記憶』など、私が最も好きな、すぐれた作品がこの時期に生まれています。

古書業界が扱うものは紙に記録されたすべての資料です。時間的長さで言えば千年以上の間に生まれた紙の資料です。新刊書店は現在流通している定価のある書籍や雑誌だけですが、この世に存在する書物のほとんどは新刊書店では購入できません。戦前の山口誓子の句集も、誓子の俳句短冊や手紙を新刊書店で買うことはできない。それらすべてを扱うのが古本屋です。

ただ古本屋が扱う前に、蔵書家がいなくてはなりません。古本屋と蔵書家が切磋琢磨して優れた蔵書が形成される。そしてその蔵書家がなくなった時、古本屋がそれを次の別の蔵書家に受け渡していく。新たな蔵書家に引き継ぐといっても、すぐに表れるわけではありませんから、古本屋はさまざまな蔵書家のものを買い入れつつ在庫を充実していき販売のチャンスを狙うのです。ただ俳句資料は数も膨大だし努めて収集する人は少なく、商品として人気はありません。勢い古書価は低いので俳句資料を扱う古本屋は少ない。だから場合によって廃棄されてしまうこともある。その意味で現在、俳句資料は危機的状態にあるのかもしれません。その点、ここに山口誓子記念館が出来てまとまった資料が保管され研究者に公開されている意味は大きい。芦屋に高浜虚子記念館もありますね。

４,『戦争俳句と俳人たち』『自由律俳句と詩人の俳句』について

私が現代俳句に興味を持つようになったのはもう 30 年以上前になりますが、昭和 32 年に角川書店から刊行された『現代俳句文学全集』の「加藤楸邨集」を買って読んでからです。十二か月に分けて俳句とエッセイが交互に配されたものです。人間探求派とか、楸邨が創刊した「寒雷」のことも全く知りませんでしたが、俳句が小説のように作家の人生と深く結びついて詠われている。いわば私小説を読むような感じがしました。以後楸邨の句集や他の著作も見つければ購入していきました。その中に昭和 13 年に交蘭社から刊行された『俳句表現の道』がありました。

昭和 13 年は楸邨が家族を抱えながら東京文理科大学に通っていた時期です。昭和 15 年 10 月には、「馬酔木」を離れ自ら「寒雷」を創刊する。お子さんはいるし生活も大変だし、師であり恩人でもある水原秋櫻子から独立するというのはもの凄いエネルギーが必要です。そういう時期の俳句入門書です。おそらく秋櫻子が楸邨の生活の為に勧めたのだと想像しますが、同時に自ら一派を立てる狼煙でもあったろうと思います。一冊の俳句入門書の背景に複雑な要素が絡んでいた。

この『俳句表現の道』がその後何度も形を変えて終戦後も出され続けたことに気が付きました。戦争の時代から平和が訪れた終戦後も同じ入門書で通じるのかと不思議に思いました。そこで他の俳人による俳句入門書を集め始めました。特に戦争に関する俳句をどのように指導しているかに注意を払うように

しました。こういう本は一冊では大した意味はないのですが、一つに集まると別の価値が出てきます。そこで、当時松本八郎さんというエディトリアルデザイナーが自費で刊行していた「舳板」と言う雑誌に、俳句入門書から見た「戦争俳句私論」を連載し始めました。「戦争俳句私論」を数回連載している内に、戦争中から終戦後の俳句を考えるには、山口誓子、日野草城、加藤楸邨、中村草田男という、昭和10年代に己の俳句観を確立し、戦後は俳壇の中核となった四人の動向を追うことが大切だと気が付きました。それを書いていくには、自分でも俳句を作ってみる必要もあるし、「舳板」のような書物愛好誌ではなく、俳人の眼が届く俳句誌に書くべきでないかと考えました。その頃、親しくさせて頂いていた詩人で近代詩の研究者である伊藤信吉さんが、郷里群馬の若い俳人たちと「鬣」という同人誌を創刊された。中核のメンバーに、前橋の古本屋山猫館書房の水野真由美と、当時は伊藤さんが館長だった土屋文明記念文学館学芸員の林政美、俳号は林桂がいて以前から知り合いでした。そんなことから事情を話して「鬣」の同人にしてくれるように頼み受け入れてもらいました。

俳句の実作に関して私はすぐ他の同人との差を突き付けられることになりました。ほぼ同世代の同人の殆どが、高校や大学時代に俳句を作り始めていました。高校生や大学生は生きている世界も狭いし様々な経験も乏しいですが、若者同士が切磋琢磨して俳句を作れる環境はほかに替え難いものがあります。山口誓子や日野草城の「三高俳句会」が現代俳句に齎した意味を考えれば、その意義がよく理解できると思います。今回取り上げる早世俳人たちは、そのような己の俳句を模索中に亡くなってしまった者たちとも言えるだろうと思います。

その「鬣」に連載を始めると、幸運、僥倖と言ってよいかと思いますが、新宿の老舗古書店文学堂書店の店主が高齢になったのと、後継者がいない為に、膨大な在庫を放出し始めたのです。内藤さんという当時80代後半の方でしたが、この方は古書全般に通じた超ベテランで、その在庫は質量ともに卓越したものです。しかも自ら目を通す形で数年間にわたって古書市場に出品してくれました。その中に彼が長期にわたって収集してきた俳句雑誌が多数ありました。虚子の「ホトトギス」、秋櫻子の「馬酔木」、飯田蛇笏の「雲母」、臼田亜浪の「石楠」、原石鼎の「鹿火屋」、吉岡禅寺洞の「天の川」、松原地蔵尊や藤田初巳らの「句と評論」、楸邨の「寒雷」、石田波郷の「鶴」などが、それぞれ数年、十数年分がまとまった形で出てきたのです。ベテラン古本屋が何年もかけて収集し管理してきたものが惜しげもなく私の目の前に現れたのです。当時入手した資料に改造社の商業俳句誌「俳句研究」の戦前版のほぼ揃いがあります。この俳句総合誌は「戦争俳句私論」の為にはもっとも参考になりました。この雑誌の登場が、それまで俳句誌ごとに別々に存在していた世界に俳句ジャーナリズムという商業主義的世界を齎すことになるのです。俳句に対し違った考え方をする者たちが同じ舞台で矛を交えることになった。極端な言い方をすると俳句で原稿料が俳人に入るようになったのです。大正末期から始まった新興俳句も昭和初期に勃興したプロレタリア俳句も、日中戦争の勃発とともに現れた戦争俳句、これは実際に戦場にある俳人が詠んだ俳句よりも、戦争報道の映画などを見て作る戦火想望俳句などが持てはやされた。その頃から、『改造』とか『中央公論』などの評論誌でも俳句欄が設けられていきます。

「舳板」「鬣」での連載を８年かけて『戦争俳句と俳人たち』（トランスビュー）にまとめました。戦時中の俳壇の中には確かに政府や軍部に迎合して俳句を戦意高揚の道具たらしめようとした俳人たちもいたし、芸術的で真摯な俳人でも真向から戦争に反対したものはいない状態でした。かつてのプロレタリア俳句を先導した左翼俳人ですら戦争報道に一役かっていました。これはある意味やむを得ないことです。問題は戦後再出発にあたり自らの戦時中の言動をいかに反省したかということであり、非難されるべき

は戦時中のことは無かったこととして済ましてしまうことでした。それとて、実は俳壇中枢部だけの問題です。全国の無名の俳人たちには戦時中も終戦後も厳しい生活の現実があっただけです。

一方で、戦争が熾烈さを増す中で、政府や軍部にとって俳句など戦争遂行には意味のないもの、なくても良い存在になっていきます。終戦後は極端な欧米化で短歌や俳句など日本の伝統文学が「第二芸術」などと呼称され存続の危機に見舞われていました。その危機を乗り越えて現代まで継続し得たのは、やはり歴史を誇る「ホトトギス」や「馬酔木」「雲母」「石楠」などが終戦間際まで継続し、終戦後も早々に復刊させた努力です。『戦争俳句と俳人たち』を刊行して考えたことは以上のような事でした。

時間も限られているので次に出した『自由律俳句と詩人の俳句』については、ごく簡単に説明させていただきます。前著ではあまり触れられなかった戦時中の自由律俳人の動向を探ろうと調べ始めたのですが、彼らの言動を見ていくと、伝統派の俳人たちよりも遙かに俳句の定型、つまり五七五の音数律や季語季題の問題を真剣に考えている。伝統派は自由律を基本俳句とみなしていないので、彼らの問題意識を無視していました。ところが実際には自由律俳句の影響は受けているのです。ただ戦争が激化する中で自由律俳人たちも徐々に体制化していき、「自由」という言葉をさけて「内在律」と呼び変えたり、口語使用から文語表現に戻ったりしていきます。以前親しくしていた近代文学の先生が、個人より国家が前面に出て国粋化が進むと、表現が文語化していく、それは危険信号なのだと言っていました。定型に捉われない日本の現代詩人たちの中には俳句を作る者が少なくないのですが、不思議にも詩人たちは定型の中で表現を工夫することに喜びを得ていた事実が分かりました。これは非常に意外でしたが、定型の持つ意味を再認識させられました。

５，早く逝きし俳人たちの存在

『戦争俳句と俳人たち』『自由律俳句と詩人の俳句』を執筆するなかで多くの俳句雑誌に触れたのですが、読んでいくと老齢で亡くなっていく俳壇の重鎮たちの訃報の他に、若くして亡くなった俳人の訃報や追悼記事に出会いました。早世俳人というと、正岡子規が 35 歳で亡くなっていますから明らかに早世なのですが、誰もそうは言いません。むしろ子規翁とか言いかねません。勿論、子規にしたら道半ばの思いは強かったと思います。早世俳人で有名な一人に芝不器男がいます。ご存じの方が多いと思いまが、愛媛県松野町の出身で大正 14 年、東北大学在学中に「ホトトギス」や、吉岡禅寺洞が主宰する「天の川」に投句しはじめ、大正 15 年には虚子が高く評価して注目を集めました。昭和 2 年に東北大学を中退しますが、誓子と共に「天の川」の課題選者になっています。大学中退の原因でもある病に襲われてしまいます。26 歳の彼の死因は肉腫でしたが、若くして俳壇でも評価され、没後、主治医で俳人でもあった横山白虹や吉岡によって句集が編まれ、戦後も何度か増補されて句集が出ています。また郷里松野町には記念館があり、出版はじめ様々な顕彰事業が行われています。今年の 6 月に刊行された高柳克弘さんの『現代俳句ノート―名句を味わう』（ふらんす堂）でも、取り上げた 26 名の俳人の 1 人です。早世俳人は不器男のみです。32 歳、ニューギニアで戦死した『旗艦』の俳人片山桃史は、日野草城に一番愛された俳人です。生前に『北方兵団』という文庫サイズの句集がありましたが、宇多喜代子さんによって『片山桃史集』が編まれ広くしられるようになっています。宇多さんには『ひとたばの手紙から―女性俳人の見た戦争と俳句』（邑書林）という名著がありますが、戦争と俳句を考えるとき、片山桃史は最も重要な俳人です。

皆さんもよくご存じの自由律俳人では尾崎放哉が 41 歳でなくなっています。現在でもスター俳人の種田

山頭火と併称される人気のある俳人です。「層雲」の主宰者荻原井泉水は、放哉の師であると共に旧制一高の同窓生でした。戦前の旧制高校から帝国大学に進んだ者には非常に強いエリート意識がありました。現在の大学生とは訳が違います。本当に選び抜かれた秀才です。それはエリート同士の強い仲間意識も生んでいました。「層雲」同人でも放哉を認めない者は多かったのですが、井泉水はその才能を高く評価し、死を惜しみ没後は句集の編纂などに尽力しました。現在では全三冊の『放哉全集』（筑摩書房）が出ていますが、没後直ぐからの井泉水の努力と顕彰がなければ放哉は埋もれたままだったろうと私は思います。ともかくも若くしてなくなっても、その功績を顕彰する優れた語り部が存在すれば埋もれてしまうことはないのです。秀でた才能があるから語り部が現れたとは勿論言えるわけですが、そこには縁というか偶然の出会いがあるのではないでしょうか。今回取り上げる早世俳人の殆どは病死、大抵結核です。しかも戦時中や終戦後の騒然とした時代、人々が自分の生活を守るだけで必死の時代に亡くなっています。出会いは偶然ではありますが、偶然をさそう必然がなくてはなりません。前提として資料に触れられることそれが偶然を演出するのです。優れた作品を残しながらも、埋もれてしまう要因は資料が容易には見られないことによっているのです。

６，不思議な出会い

私が最初に埋もれた早世俳人の存在に気付いたのは、鈴鹿野風呂が主宰していた「京鹿子」に日野草城や誓子とともに参加していた旧制三高生中西其十でした。やはり三高俳句会のメンバーだった平畑静塔の句集『月下の俘虜』（酩酊社）の序文を誓子が書いていて、三高俳句会で出会った俳人を列挙した中に「在学中に死んだ中西基十」とありました。個人の句集は出ておらず、俳句文学事典類にも立項されていませんが「京鹿子」の解説の中に名前があり、「基十」は「其十」の誤植と分かりました。

誓子の記憶に残る夭逝の俳人其十に興味を持ちともかくも「京鹿子」の大正 10 年前後の号を見ようと思いましたが、関東には所蔵している機関がありませんでした。そこで『戦争俳句と俳人たち』刊行後に文通が生まれた、「京大俳句」を読む会の西田元次さんに相談しましたら、島田牙城さんが主宰誌「里」の 104 号に「京鹿子」十七輯の「其十句集」を再録すると共に其十追跡の特集をしていて、そのコピーと、後には京都の鈴鹿野風呂記念館に所蔵されている「京鹿子」掲載の追悼記事まで手配して下さいました。

牙城さんが其十を知るきっかけとなったのは関西大学の教授だった祖父・島田退蔵の古稀記念論文集に掲載された金子又兵衛の「中西其十論」でした。金子は誓子も先の序文の中で触れている三高俳句会の金子無絃の本名です。その『島田教授古稀記念国文学論集』も、インターネットの古書サイト「日本の古本屋」を検索したら 1 冊のみあり幸運にも入手できました。

本日、今回取り上げる早世俳人たちの作品からそれぞれ私が 10 句から 15 句を選んだものを配布して頂きましたが、代表句を選ぶのは非常に難しく、別の方が選んだら全く別のものになるでしょう。

其十にしてもそれは同様で、芝居が好きで、自ら女性になりきったような官能的とも言える俳句を詠んでいた其十を、後に一世を風靡した草城の「ミヤコ・ホテル」に先行した俳人と捉える点で、直接交友のあった金子無絃と、現代の俳人牙城さんの眼が捉えた其十論には共通したものがありますが、牙城さんは、其十が埋もれたのは、活動期間が二年数か月と短く、まだ若い友人たちがそれぞれの精進を重ねる中で其十を忘れ、語ることがなかったからだと書かれています。私も同感です。金子又兵衛さんの其十論に触れた俳人は少ないでしょう。牙城さんの「里」に掲載された其十発見の文章は反響を呼んだようです。

私もまた西田元次さんのお勧めで「中西其十の跡」と題した小論を「京大俳句を読む会」の機関誌に発表

させて頂きました。所属を同じくする同世代の俳人たちには、ムーブメントというのか、互いに切磋琢磨する中で出来て来る共通の傾向のようなものがあります。草城や田中王城など他の三高俳句会の仲間と共に其十も「ホトトギス」に投句してそれぞれ好成績をのこしていますが、当時の「ホトトギス」雑詠欄の巻頭を飾った作品とは明らかに違っています。彼らにはどこか共通したものがあります。その共通の傾向のさらに奥にあるそれぞれの個性を探ることが肝心ではないかと思うようになりました。私が其十の存在に気付く少し前に牙城さんが詳しく触れていたのですが、私はこの其十との出会い以降、早世俳人のことを意識的に調べてみようと思い始めました。

ところで最初に私が其十の存在を知った平畑静塔の『月下の俘虜』ですが、版元の酩酊社の社主は、といっても他に社員がいるわけではないのですが、本島高弓です。彼もまた埋もれた早世俳人の一人であったことは、ずっと後になって知ることになります。彼についても後に触れます。

次に出会ったのは、「黄橙」や「句と評論」の同人であった田中青牛です。彼もまた結核で 30 歳でなくなっています。「句と評論」の昭和８年１月号（２巻１号）に「新興俳句小会　常陸笠間田中青牛報」という小さな記事に出会いました。笠間は益子とならぶ東日本有数の陶器の町で、日本三大稲荷の一つ笠間稲荷神社で有名ですが小さな田舎の盆地です。私の生まれた町でもあります。そんな田舎町に昭和８年、新興俳句を縹渺した「句と評論」の支部があり活動をしていたと知り本当に驚きました。さらに衝撃を受けたのは、同じ年の「句と評論」９月号に掲載された田中青牛の追悼記事でした。青牛の妻田中みぐさの執筆した「臨終記」は哀切極まりない内容でした。本日お配りしたプリントの中に拙文「残してあげたい―早く逝きし俳人たち」があります。また、インターネットを利用できる方は、「古本が繋がる時」で検索して頂くと出てきます。青牛関連資料との出会いを書いていますので読んで頂ければと思いますが、私と同郷の俳人で、彼は法政大学を卒業していますから、私の先輩でもあった田中青牛とはどんな俳人であったか、強く興味が湧きました。幸い「黄橙」や「句と評論」は手元にありましたので、青牛や妻みぐさの俳句を拾っていきました。余りの偶然に驚いたのは、偶々二冊だけ所持していた、細谷源二主宰の俳句誌「氷原帯」の 1967 年 7 月号が「句と評論・広場」特集号で、松原地蔵尊が書いている「『句と評論』創刊より九年までの展開」で全国に先駆けて笠間に支部を開いた青牛について触れているのに加え、再婚して関口姓になったみぐさが「たぐり寄せられた綱に」を寄稿していました。みぐさは青牛には触れていませんが、夫の没後東京に戻り俳人として活躍した様子が読み取れました。そして何と、彼女が江原という、やはり「句と評論」に関係した方に宛てた手紙が挟まれていたことでした。こうしてある程度青牛の作品や生涯が辿れたと思った時に、種田山頭火を研究している友人の古川富章さんが、古本販売サイトの「日本の古本屋」に『田中青牛遺句集』（昭和 62 年・三元社）が出ていると教えてくれました。版元の三元社は俳人の幡谷東吾さんの経営です。幡谷さんは「日本古書通信」の長い購読者で、当社の事務所にも神保町での古書探しの折に立ち寄ってくれていました。俳句史資料の著名な収集家でもありました。ただ私が俳句史に興味を抱く前に亡くなっていました。西東三鬼や三谷昭と「扉」を創刊するなど新興俳句の重要俳人の一人でした。今も生きていたら聞きたいことが沢山あり残念です。茨城県石岡市の出身ですから青牛とも親交があり、堀直子に青牛の遺稿集刊行を奨めたようです。

笠間の月崇寺で青牛の葬儀が行われたのですが、この寺は著名な哲学者梅原猛さんが著書『歓喜する円空』（2006 年・集英社）で円空仏の中でも重要な意味を持つ観音菩薩像を所蔵する古刹として紹介しています。私は円空にも興味があり訪ねてみました。佐白山という城址のある山の麓にあるのですが、青牛が住んでいた家の近くでもあります。ご住職の奥様に会うことが出来ましたが、九十年も前のことを知る

はずもなく、田中家の墓地は寺ではなく、実家のある石寺という町場から数キロ離れた山の中です。残念ながら円空の観音菩薩像も県立歴史館に寄託してあるとのことでした。
先の島田牙城さんが其十の山深い故郷に足を運ばれたのに習って、私も二度その石寺という地域を訪ねてみましたが、墓地は発見出来ませんでした。大正期にこの山奥の村から上京して法政に学び、恩師勝峰晋風に出会い、その主宰誌「黄橙」で俳句を始め、勃興してきた新興俳句に触れて「句と評論」に参加、法政の先輩藤田初巳との関係もあったようです。卒業後は藤田のいた保全商業の教師になりますが宿痾の結核に冒されてしまいます。
恐らく、最初から『田中青牛遺句集』に出会っていたら、私は青牛追跡に駆り立てられることはなかった気がします。「句と評論」の小さな数行の記事の出会いが大きかった。
俳句も然りながらその数奇な人生に触れて心を揺さぶられたのは、昭和 22 年 7 月に九州の炭鉱落盤事故により僅か 27 歳で亡くなった松本青志でした。中島斌雄さんが戦後創刊した「麦」を読んでいましたら、昭和 22 年 9 月号に「深悼故松本青志氏」という見開き 2 頁の記事に出会いました。その頃、2 年ほど前ですが、私は自ら炭鉱労働者になって過酷な労働環境で働く人々に寄り添い文学活動を展開した上野英信に興味をもって著作を読んでいたこともあり、落盤事故で亡くなった早世俳人に惹かれました。
青志は大阪の下駄職人の家で生まれたのですが、母を早くに亡くした上に父親が病弱で幼いころから家業に携わっていました。そんな中でも俳句を志し、小野蕪子主宰の「鶏頭陣」に投句して研究にも熱心でした。やがて応召して中国大陸から南方へという陸軍招集兵お決まりの転戦を経験します。幸い無事帰還しましたが家は空襲で焼失しており、父も亡くなっていました。しばらく姉の嫁ぎ先で傷心を癒していましたが、新たな人生の活路を九州の炭鉱に求めることになります。戦後復興には石炭の増産が求められていました。古い職制制度の残る炭鉱、ことに小さな炭鉱ほど過酷な世界でした。私を含め、本日お集りの皆さんの世代だと、炭鉱事故のニュースは頻繁に聞いていたと思います。戦時中に強制連行された朝鮮半島の人たちもまだ多く残っていた終戦直後の炭鉱は今では考えられないような世界だったろうと思います。その中でも青志は俳句を捨てずにいて、「鶏頭陣」以来の友人川口さゞれの誘いを受けて、中島斌雄が創刊した「麦」に参加し、投句し始めたところでした。戦時中に主宰小野蕪子が亡くなり「鶏頭陣」は終刊していましたが、中島斌雄も「鶏頭陣」の同人でした。「麦」に掲載された青志の追悼記事は無名の俳人のものとしては異例の扱いです。川口の人一倍強い思いに中島斌雄が応じたものでしょう。その記事で川口は遺稿集の刊行の協力を呼び掛けていますが、実現したのは 10 年後で、同じく早世した安土利一との共著として刊行された『句集青土』（昭和 32 年・麦叢書）です。麦叢書に『黒土』がありますが、青志と安土から一字を取り『青土』としたのでしょう。青志の 130 句あまりが収録されています。この句集は未所持ですが、国会図書館には所蔵されていて、折から開始されたデジタルコレクションの公開サービスでコピーを入手することが出来ました。
今回講演を依頼された時、最初にもしかして誓子旧蔵書に『句集青土』があるのではないかと思いました。川口は誓子に寄贈した筈だと思ったのです。ネットで神戸大学図書館の蔵書検索は出来ますから調べると案の定所蔵されていました。調べた限りで所蔵されているのは国会図書館と神戸大学のみです。

７，荻原井泉主宰『層雲』の早世自由俳人

俳句に興味のある方でも、近代日本の自由律俳人の名前を挙げて見よと言ったら、恐らく答えは種田山頭火と尾崎放哉、もしかしたら荻原井泉水の名が出るだけだろうと思います。彼らはみな「層雲」に属し

た俳人です。井泉水が自由律句を提唱した同時期に、中塚一碧楼が主宰した「海紅」があり、やはり多くの俳人を擁し、昭和 19 年に一碧楼が亡くなった後も継続されていますが、彼のことを知る人は稀でしょう。私の好みで言えば、一碧楼の俳句に一番惹かれます。拙著『自由律俳句と詩人の俳句』は彼の

とつとう鳥とつとうなく青くて低い山高い山

すうたらぴいたら少年ピッコロを吹く春の地しめり

などの作品に触れたことが山頭火や放哉以外の自由律俳句に興味を抱くきっかけになりました。

ただ、「層雲」から独立して栗林一石路や橋本夢道が「生活俳句」や「プロレタリア俳句」を創刊するなど「層雲」が俳句史に残した功績は偉大なものがあります。それを主導した井泉水のカリスマ性や、膨大な著書を生み出したパワーは底知れないものがありました。

その井泉水に僅か 38 頁の『層雲の道』という昭和 30 年に刊行された冊子があります。「層雲叢書　第一冊」と記載されています。ここには「層雲」の発展に寄与し亡くなった四人の俳人が追想されています。1918 年に 26 歳で亡くなった野村朱鱗洞、1926 年 41 歳没の尾崎放哉、1933 年 44 歳没の大橋裸木、そして 1940 年 58 歳没の山頭火です。早く逝きし俳人と言うなら朱鱗洞こそ取り上げるべき俳人で、『野村朱鱗洞遺稿句集』も刊行されているのですが、何故か、いわゆる「ビビット来る」出会いがなかったのです。

四人の中で、大橋裸木は「陽を病む」という僅か四音の作品があることで一部では知られていますが、彼は「少年タイムス」という児童雑誌の編集者であり、自ら童話も書き、句集も『人間を彫る』『生活を彩る』『四十前後』『海国山国』という四句集を出し、『鬼貫俳句集』『芭蕉俳句集』『一茶俳句全集』を編纂、また『現代俳句辞典』というポケット辞典も出しています。井泉水も他の「層雲」同人たちからも将来を期待されていましたが、結核を患い昭和 8 年、静養先の伊賀の曽爾で 44 歳の生涯を閉じています。最後の句集『海国山国』の原稿は総て整理を済ませた後に亡くなり、井泉水の序文は追悼の文章になってしまいました。肖像写真がありますが、ご覧のようなスマートな美男子で、「層雲」の同人たちからも大変に慕われていていたようです。昭和 14 年に改造社から『俳句三代集』という全九巻別巻一冊の豪華な全集が出されますが、その別巻が『自由律俳句集』です。この全集は当時の 28 名の有力俳人、誓子もふくむ顧問・評議員によって編纂されましたが、その中に自由律俳人はおらず除外された。後に文学報国会が結成され俳句部会もありましたが、当初は伝統俳句の一部と、自由律・川柳の二部に分けるなど、自由律は別のものとみなされていたのです。それでも本編の九巻完成後に、「層雲」の井泉水と「海紅」の一碧楼が審査員となり、公募と著名俳人の自選句、及び故人に関しては井泉水と一碧楼が選んで全体で 700 余名、3448 句が収められました。プロレタリア俳句系の人たちは編集方針に異議ありとして応募していないなど多少問題はありますが、古本でも比較的入手しやすい重要な参考文献と言えます。しかも巻末には採録された俳人たちの数行とは言え略歴が記録されているので自由律俳人の人名事典的価値もあります。一人最大 40 句ですが、裸木は 40 句が収められた。因みに放哉 40 句、山頭火は 19 句です。井泉水の亡くなった裸木と放哉への思いの強さが解ります。山頭火は当時 57 歳、自選句の最初は有名な「分入つても分入つても青い山」にしています。裸木の句集は現在、国会図書館のデジタルコレクションで閲覧やコピーが遠隔の地にいても出来るようになりました。古本で買ったらみな数万円もして簡単には手を出せませんが、研究の基本は整ったといえると思います。ただ最初にも言いましたように、裸木は句作ばかりでなく、近世俳人全集の編纂や童話の創作など幅広い活躍をしていますので全体像を掴むのは容易ではありません。

もう一人『層雲』の早世俳人河本緑石についても触れたいと思います。本名は義行で 1897 年明治 30 年に鳥取県倉吉で生まれますが、中学時代から『層雲』に参加し、卒業すると遠く盛岡の高等農林学校に入学します。そこで宮沢賢治と出会います。やがてこの二人と山梨出身の保阪嘉内、栃木県出身の小菅健吉が中心となって同人誌「アザリア」を創刊して 6 号まで刊行します。義行は既に「層雲」でも注目の俳人でしたから「アザリア」にも毎号俳句を載せています。十句選には入れていませんが「水をはなれてしみじみ空をまへる鳥」とか「蛍ひそまるその水その草も夜」など良い句があります。
筑摩書房から増補しながら何度も『宮沢賢治全集』が刊行されていますが、「アザリア」も収められています。卒業後、賢治が『春と修羅』を刊行し、緑石にも送られました。大正 13 年です。緑石は触発されて翌年『詩集夢の破片』を刊行します。賢治に触発された旨を保阪に緑石ははがきで伝えています。俳句ではなくいわゆる自由詩です。緑石が賢治にどんな謝礼の手紙を出したか、そういうものがあるかどうか分かりませんが、若い時代を共にした二人の友情は遠く離れていても続いていたろうと思います。
現在、賢治俳句が 30 句ほど確認されています。実は、私の『自由律俳句と詩人の俳句』の元となった「鬣」の連載では賢治俳句についても書いたのですが、他の賢治作品に比しつまらないというか問題性が感じられず、本にまとめる際に除外しました。当時は賢治と緑石の関係を知らなかったというよりも緑石のことを全然知りませんでした。賢治は「アザリア」に掲載された緑石の自由律俳句を読んでいたはずですが、今回改めて賢治俳句を読み直しても、影響は感じられません。
緑石は昭和 8 年に亡くなった尾崎放哉の評伝をその年の内に脱稿していました。放哉は同じ鳥取の出身で 12 歳も上ですが、「層雲」デビューはほぼ同時期でした。評伝執筆は井泉水の勧めもあったのかもしれません。ただ刊行されたのは緑石の没後 2 年目の昭和 10 年でした。勤務していた地元の農業学校の水泳訓練中に溺れた同僚を救おうとして昭和 8 年 7 月に亡くなってしまったのです。賢治も 2 か月後の 9 月 21 日に亡くなるのですが、緑石の死は『銀河鉄道の夜』のカンパネルラに投影されているという説もあります。
緑石が生前に自らの句集を出していたら、賢治には放哉の句以上の衝撃を与えたに違いないと思います。緑石の俳句が一冊にまとめられたのは、昭和 10 年に刊行された『大山』でした。現在、郷里倉吉に生誕百十年を記念して河本緑石研究会が発足し研究誌「ふらここ」や、「ふらここ叢書」と名付けられたシリーズは『河本緑石作品集』や『河本緑石句集』など驚くべき精緻な編集がなされています。一般的には無名と言ってよい一俳人の顕彰事業としては他に類をみない見事なものだと思います。本日「ふらここ」1 号と『河本緑石句集』を展示しました。残念ながらこの成果が広く知られているとは言い難いのですが、俳句の世界だけでなく賢治研究にも利用されることを望んでいます。

８，実社会に出る前の早世

非常に優れた頭脳と、強い意志を持ちながらも、それこそ不条理きわまる宿痾結核により、実社会で働く経験を持たぬまま早世してしまった学生俳人がいます。瀧春一主宰の「暖流」所属の藤田源五郎と、中村草田男が「萬緑」を創刊するのに貢献した堀徹の二人です。

本人はそうは言わないのですが、前衛俳句の旗手ともいうべき高柳重信の「続偽前衛派」（火山系昭 23・12）と「藤田源五郎への手紙」（俳句世紀昭 24・１）は戦後俳句に興味のあるものには周知の評論です。しかし、その批判の対象となった「俳句による文化闘争」を唱えた藤田源五郎の評論や俳句を読んだ者は稀だろうと思います。重信大正 12 年、源五郎大正９年生まれでほぼ同世代、しかも昭和 23～24 年二人

は重篤な結核患者でした。一人は昭和 58 年 60 歳まで生きて俳壇の寵児となり、一人は実社会に出ることもないまま昭和 23 年に滋賀県草津の療養所で 29 歳の命を失っています。当時の様々な俳句誌を見る限り、3 歳年長の故もあろうが源五郎の方が俳壇での場所を得ていたように思われます。

源五郎が俳句史に埋もれた要因は、その評論や俳句に触れることが困難だからだろうと思います。確認できたのはたった一冊だけですが、昭和 24 年に父藤田仁太郎によって遺稿集『驢鳴抄　藤田源五郎遺句集と俳論』が刊行されています。愛媛県立図書館に俳句誌「こよろぎ」同人深川正一郎氏から寄贈されたものが所蔵されています。コピーを取り寄せると、強気な評論のイメージとは違う和服姿の眉目秀麗な肖像写真が巻頭に置かれていました。スクリーンをご覧ください。次に略歴が紹介されています。簡単に記せば東京四谷生まれ、都立一中、成城高校を経て昭和 16 年東大経済学部入学、翌年結核で鎌倉七里ガ浜聖テレジア療養所入所、一旦平癒して昭和 18 年に同大学院入学を果たしたが再発、20 年 4 月に草津療養所に疎開入院、23 年 6 月 23 日に亡くなっています。七里ガ浜時代から俳句に親しみ「暖流」「こよろぎ」「青潮」「沙羅」「北方俳人」などに評論や俳句を寄稿したとあります。遺稿集には俳句ノートに記録された三千句から二百余句が鈴木芳如、高橋星河によって選ばれ、評論三篇「現俳壇と第二芸術」、「俳句評論を確立せよ」、「俳句以前の問題」が収録された他、瀧春一、石橋辰之助、佐野まもる、深川正一郎などの追悼句が寄せられています。昭和 24 年に亡くなる辰之助の「夏野を駆け駆けては歌ふ君なりしが」は、源五郎の一面を語っているように思いますが『定本石橋辰之助全句集』（昭 44・俳句研究社）には未収録です。重信の反論の対象となった「暖流」第三巻三号（昭 23・３）掲載の「赤黄男論―作品の特殊性とイメージについて」が、何故遺稿集から省かれたのか分かりませんが、病床で死力を注いだ原稿用紙 43 枚の長編評論です。これは富澤赤黄男や当時恵幻子と称していた重信たちの「太陽系」に対する批判です。

リアリズムとロマンチシズムは相反するものではなく。高度なリアリズムは当然ロマンチシズムを結果とする、それに反してリアリズムの否定に立つロマンチシズムは浪漫のための浪漫となり、歴史的、社会的真実を捉えることはできない。簡単に言えば赤黄男たちの俳句は現実変革から逃避した好事家的な俳句であり、徒に難解になりすぎているという批判です。詩や俳句に表面的な意味を持たせないというのが前衛の意識かと思いますが、源五郎はその点の理解が無いようです。

戦後文芸復興の中で俳句も存続の危機にあったわけですが、変革を目指す俳人たちの中で富澤赤黄男はもっとも大きな存在だった。それ故に、この最も重要な評論が省かれたのかと想像してしまうほどですが、遺稿集の限られた枠に収めるには長すぎたのかもしれません。変革は一朝一夕に完成するものではないとしつつ、非常にピュアな「俳句による文化闘争」論を展開したもので、頭脳の明晰さを感じる評論ですが純粋すぎるというか、やはり机上の論議である憾みを感じます。大学時代もほぼ療養に終始してしまった彼の不運、未完成であるのはやむを得ないと思います。しかし無価値ではなく読まれるべき評論だと思います。もう一点、これだけ重要な俳人なのに富澤赤黄男の全集がないのも不思議ですが、全句集は二回出ていますが、評論・エッセイ類を集めた著作がない事です。重信はじめ赤黄男信奉者は現在も多いのに不思議です。

ここで取り上げるもう一人が堀徹です。金子兜太さんの岩波新書『わが戦後俳句史』で描かれた堀徹の印象は強烈で、私の俳句の友人たちも同様に記憶したようです。しかし、その作品や批評に触れたことがある人は、藤田源五郎同様に稀だろうと思います。私は『戦争俳句と俳人たち』で取り上げた中村草田男と加藤楸邨の戦中から終戦後の言動を探る中で、堀も後期の主要メンバーだった学生俳句連盟機関誌『成

層圏』に参加した学生俳人たちの存在の大きさに気付きました。しかし『成層圏』の全体を把握することはできず、俳句文学館が所蔵するコピーで垣間見たくらいでしたが、拙著刊行後、神保町の古書店田村書店の均一箱で、堀徹の遺稿集『俳句と知性』（1962・遺稿刊行会）を見つけました。堀は俳句文学事典類にも立項されておらず、遺稿集が出ているとは知りませんでした。その後、堀が創刊に係った「萬緑」の創刊当時のものもほぼ入手出来ましたが、まだその足跡を追うには何か足りないものを感じていました。いよいよ堀を取り上げねばと考え始めた昨年初め、北上市の日本現代詩歌文学館に「成層圏」の揃いと、その前に堀が中島斌雄（月士）らと刊行した「季節風」創刊号があるのを知りコピーを入手、「季節風」は二号で休刊してしまいますが、これは新宿の俳句文学館にありました。これに『俳句と知性』を参考にすれば、堀の短くはあったが激しい俳句人生を辿る準備が出来ると思いました。そこで「日本古書通信」の昨年 3 月号から「堀徹の俳句と批評」を連載しました。調べることが出来た雑誌掲載の俳句の全てと、批評やエッセイはタイトルを記録し、簡単なコメントを添えた年譜のようなものです。
実質的な俳句創作のスタートとなった「季節風」の創刊号（昭 11）に「我々の言葉・俳句は子規の保守的一面を盾とすることに依つて、俳句を固定化し、趣味化した。新興俳句は理論追求の真摯なるにも拘わらず、一面的な破壊を以て、俳句文学を混乱させ、その安易な作品傾向は徒らに退嬰化の一途を辿つてゐる。我々は堅実なる歩みを以て、伝統俳句をその歴史に於て正しく検討し、俳句の限界性を明かにし、俳句を保守化するものと抗争し、飽く迄リアリズムの旗の下に進むことを誓う」と言上しています。堀は本格的に俳句に関わり始めた時から、俳句型式への信頼ではなく、懐疑から出発している。その後も、「成層圏」「萬緑」でもその姿勢を貫き、重篤な喉頭結核という現実もあったが最終的には俳句から離れていったのが堀の俳句人生であったとは言えるだろうと思います。最後の病床で詠んだ短歌は心に痛く刺さります。
堀も結核で死亡するのですが、源五郎と違い東京大学を卒業した後、神奈川県の湘南中学、府立工芸学校、府立二十一中学、府立武蔵中学に勤めますが、その間 6 年ほどで、いわゆる腰の落ち着いた状態ではありません。教師たらんとしたのかも不明ですが、「成層圏」時代以降批判しながらも支え続けた中村草田男が、俳壇の頂点に立ってからも終生大学の教師であり続けたのとは大違いです。
藤田源五郎と堀徹には最高学府を出たものとしての強い矜持と、選ばれし者エリート意識の高さを感じます。しかもその奥に健康への不安や、堀の場合は中学時代にサッカーの事故で右目の視力を失い、左目も強度の近視であったというハンディーを抱えていました。
実人生の進化や、生きる世界の拡大によって、その人の俳句は変化、成長していくものと私は考えますが、早世故に一瞬間輝く光より、やはり長い時間をかけて磨き上げられた光の方が遠くまで照らすのではないかと思います。

９，高柳重信の影で

前項で高柳重信のことに触れましたが、現在も重信信奉者は多いです。事実私が所属する「鬣」のメンバーの多くがシンパです。同人ではなかったのですが、岩片仁次さんという重信の書き残したものすべてを集成することに生涯をかけた俳人も「鬣」の友人としておられました。私自身は重信が追求した多行俳句にはなじめない面があり、信奉者ではありません。ただ、彼が編集に関わった戦後の「俳句研究」が俳句史研究に残した功績は甚大だと思います。俳句表現史の先頭に自ら立つのだという意識が誰よりも強かった俳人だと思います。

それ故に重信が重視しないとあたかも評価の低い俳人とされかねない面があります。昭和 52 年に重信の編集で『昭和俳句選集』（永田書房）が出されました。昭和 5 年から昭和 51 年まで 136 名の作品が集められています。虚子や秋櫻子は勿論、重信の系譜に関わる日野草城も、山口誓子、石田波郷、加藤楸邨、中村草田男も除外されていますから、かなり恣意的な編集だと分かりますが、彼の同行者であった本島高弓や柏原鷹一郎が選ばれていないのが不思議なのです。二人はやはり若くして亡くなっています。

本島高弓は、昭和 30 年に 43 歳でなくなっています。三省堂『現代俳句大辞典』にも立項されていますが、1912 年東京浅草区（現台東区）生まれ。府立七中を経て日本大学経済科中退。1938（昭 13）年、大場白水郎の「春蘭」に参加。40 年、新興俳句に共鳴し日野草城の「旗艦」に参加、のち「琥珀」同人、41 年、加宮貴一らと同人誌「日月」を創刊。戦後は「太陽系」「火山系」「黒弥撒」「七面鳥」等を経て、52 年、富沢赤黄男を擁して高柳重信と「薔薇」を創刊。また、大野我羊の「芝火」「俳句世紀」「東虹」等を編集するとともに、句集出版の酩酊社を自営。」とあります。この解説で、高弓が「現代俳句」の王道を歩んだことが分かります。ただ高弓が俳人として目指したものも、人生上で背負ったものも分からない。また「薔薇」の昭和 30 年８・９月合併号が重信編集で全 58 頁を追悼号に宛てられています。高弓は「薄明の俳人」と評されていていました。昭和 18 年突然網膜炎になり、以後眼疾は進行し、晩年は失明に近かったと言われています。この眼疾が高弓俳句の本質とは私は思いませんが、生活に及ぼした影響は甚大でしたので、辞典にはその点も触れてしかるべきだろうと思います。「薔薇」追悼号には、甲田鐘一郎、古川克己、赤尾兜子、幡谷東吾、三橋鷹女など 23 名が追悼文を寄せており、いずれも心の籠った追悼文ですが、その中で重信は「沢山の名実ともにそなわった追悼文があつまるだろうから、僕だけは、思い切って冷たい、辛辣な追悼文をかくことにしよう」と書いています。辛辣とは思いませんが、次のような記述がある。「巷間の説によると、本島高弓は、俳句作家として不幸であつたというのが専らのようである。彼は、その本領が別にあつたにもかかわらず、富沢赤黄男、高柳重信らとの交友にひきずられて、心にもない傾向に進んだために、遂に大成を逸したというのである。僕は、この憶測ぐらい本島高弓を傷つけるものはないと思う。それは、この高邁な克己心を持つた一人の詩人を、あの新興俳句陣営に属した他の四十代の不勉強な作家たちの線へ無理に引きずり落とすものでしかない。」と力説しています。

私は最初に「並走者」といいましたが、重信が先を走り、高弓はその後を追った関係と見るべきでしょう。ただ高弓への強い思いが無ければこの重厚な追悼号は生まれませんが、先に言いましたように『昭和俳句選集』には、高弓の句は一句も採録していません。

本島高弓は、戦後、「太陽系」「七面鳥」「火山系」「俳句世紀」「俳句世界」「俳句往来」などに盛んに俳句、詩、評論、エッセイなどを発表しています。いずれも現在では入手の難しい俳句誌です。句集は三冊出ていますが、評論類を読むのは容易ではありません。

彼は戦後復興期と自らを重ねるように、青春期の持つ情熱こそ文学の目指すものだと唱えています。それは「春蘭」から「薔薇」「太陽系」へと、俳句形式の可能性への模索でもあったのだろうと思います。

重信のように極めて密接な関係にあると見方も複雑な様相を帯びてくるのでしょうか、「薔薇」の追悼文も「俳句世紀」昭和 26 年 1 月号に掲載された「幸矢誕生」も比較的長文ですが、高弓の俳句の引用や評はなく、人間高弓論といった感じです。

重信は、相互の友情を信じて、『斜陽』と『幸矢』の刊行にあたり、二度「追悼文」のような紹介を書いたと書いています。「本当にすぐれた詩人には「進歩」などという観念的で、しかも空疎な言葉は無縁なのである。ただそこに、率直に、彼の変身と転身を我が身に課した彼の詩魂と克己心を読みとればよい

のである。」と書き、「俳句」昭和 33 年 5 月号の「『薔薇』の六年」では、「薔薇」は彼の遺産であり、彼の役割は共和国の総理のようであり、彼の急死によって「薔薇」も終わったと、高弓を詩人俳人として認め、最高の理解者を任じながら、個々の作品には触れず、また『昭和俳句選集』に一句も収録しなかった重信の心中はどのようなものであったか推し量るのは難しい。

寂寞とした印象の強い作品ではあるが、高弓の描いたのは家族愛であったと思う。そこから一段抜け出して高見へと至らなかったことを重信は惜しんだのかもしれない。

ともかくも高弓の戦後の執筆は調べれば調べるほど広範囲な雑誌に執筆していました。自ら興した出版社酩酊社も、印刷は重信経営の印刷所でした。眼の悪い高弓には通常の仕事に就くのは難しく、生活のために起こしたものでしょう。でも出版には視力は不可欠です。生活の困窮が想像されます。

ここで取り上げるもう一人は柏原鷹一郎です。実は「かしわばら」か「かしはら」か、「よういちろう」か「たかいちろう」か正式な読みが分かりません。「重信の影に」というテーマですが、彼は応召してニューギニア戦線で戦死していますから、戦後の重信と交流があったわけではありません。むしろ富澤赤黄男の盟友というべきで、「旗艦」と「琥珀」で活躍していました。やはり重信の編んだ『昭和俳句選集』には一句も収録されていません。

柏原鷹一郎の存在に気付いたのは最近です。林檎舎版の『富澤赤黄男全句集』に『雄鶏日記』という冊子が付録されています。その中で、赤黄男は「「夕べあたゝかき山みてあれば吃るかな」柏原鷹一郎よ、きみもぼくも吃ってきたね。・・・・。きみはもう、あの炎帝の豪雨の中で、天へ駈け上つてしまつた。もはや、きみは吃ることはない。朗々と大声で歌つてゐることだろう。地上の僕も、だれもみんな、もう吃らなくてもよくなつたよ。地上で僕は歌ふ。天上のきみに和してね。そして、天上の声を、それがどんなに低い声で歌はれようとも、僕は決してきみを逃しはしない。鷹一郎よ、歌つて呉れ。もはや吃らず笑つて歌つてほしい。」富澤赤黄男にこのような美しい詩を書かせた柏原鷹一郎とはどんな俳人であったかと強い興味を抱きました。すると、これも偶然一部だけ所持していた『俳句界』12 号（昭和 23 年 4 月）に、「柏原鷹一郎作品集」が掲載されているのに気が付きました。

解説的に添えられた古川克己の「柏原鷹一郎の俳句」には、「昭和十年前後を契機としてぼつ興した俳句の革新運動の華やかさの中で、多くの礎として消えた無名の人々について、人々ははやくも忘れさらうとしてゐる。この健忘症の世人の間では僅かに四、五の特異な俊才の業績のみが記憶にのこつてゐる様であるが、この光芒を引くがごとく消えさつた俳句詩人の一人として柏原鷹一郎（旗艦同人）の仕事は、かなり高く評価されてよいと思ふ。今日、ダダまがひのニヒリズムの悲鳴は、若いゼネレーションの間でかなりきこえるが、鷹一郎はこんなことは七年も前に身をもつて通過してゐる。彼のいろいろの実験的諸作は、新興俳句の中期に於て既に試みられたが、強烈な意識とあまりにも飛躍した抽象的諸作は一部の具眼の士の興味を惹くに止まり単にあたらしがりやの程度として多くの黙殺の憂目を見たやうである。この鷹一郎の特色は、その時代の知的勤労青年の社会感情をも或程度まで反映もしてゐるが、多くは緘口されたもののもつ、爆発的なニヒリズム、積極的なダダイストの精神が内に臓されてゐる。」。これは最高の賛辞と言えるでしょう。古川は触れていませんが、鷹一郎は『旗艦』終刊後、俳誌統合で創刊された『琥珀』に最後の光彩を放ちます。多くの評論も寄稿していますが、「戦争俳句の表現と動向」「現代俳句近作検討」（『旗艦』）に見るように、当時注目を浴びた戦火想望俳句に集中して取り組んだ時期があります。これは確かに実験的俳句創作ではあるけれども、時を経てみた時に芸術としては無残な姿をさらしていると言えると思います。しかし、現実に身を戦場に置かねばならなかった『琥珀』時代の作

品は、北辺にある兵士の心情が強く伝わってきます。先ほども触れましたが、当時戦争俳句の名作とされ、今も評価の高い片山桃史の『北方兵団』（三省堂・俳苑叢刊）に匹敵するものと思います。ただ、この「俳句界」の記事以外にまとまったものはおそらくありません。この記事には鷹一郎が何時どこで亡くなったかは書かれていませんでしたが、「円錐」同人の今泉康弘さんが、古川克己の『体験的新興俳句史』に「ニューギニアで戦死した」と書いていると教えてくれました。2000 年に出た本です。

10、俳句界における「学歴」の意味
11、通説、の偏見の壁

時間も迫ってきましたので、レジメの 10 と 11 はかいつまんでお話したいと思います。
鎌倉鶴丘の本名は廣義といって東京の方です。ご両親は岐阜県美濃出身であるいは彼もそうかもしれませんが、昭和 19 年 10 月に 30 歳で亡くなった時には渋谷に住んでいました。昭和 11 年ころから「馬酔木」に投句し、秋櫻子も期待していた存在のようですが、昭和 15 年に楸邨が「寒雷」を創刊する時に行を共にしたというよりは、独立の立役者の重要な一人だったようです。戦争末期に結核でなくなるのですが、生前にも没後にも一冊も著書はありません。創刊同人でありながら、終戦間際ということもあり追悼号も出ていません。詳しい追悼記事が出たのは、昭和 34 年 2 月の「寒雷」200 号記念号でした。実に 15 年後でした。「寒雷」昭和 19 年 12 月号に同人たちの追悼句が掲載されていますが、多くの友人たちも戦地にあり、楸邨は情報局の要請で土屋文明と共に中国大陸に旅行中でした。鶴丘の末期の作品を読むと、出征していく友人たちを見送りながら、自分は病床にあってお国に報じることが出来ないという悔しさが溢れています。平和な時代を生きてきた我々からするとどうしてと思いますが、それが当時の青年の共通した意識だったのでしょう。何と言う不条理だろうと思います。
今、ウクライナの人たちが国の為に多くの犠牲者を出し続けています。父親を亡くしたお子さんたちも多いし、家族を残して戦地に向かう人々の苦しさも想像できます。どうしてこの惨い戦争を止めないのだと我々は思うし、それは間違いではないのですが、ウクライナの人たちは違う思いなのでしょう。国の尊厳が損なわれることは自らの尊厳が冒されているのだと考えていると思います。
日本の戦前もそのようだったのでしょう。本当は国の尊厳より一人の人間としての尊厳が優先されるべきなのですが、国や民族がその前に立ちはだかる。福永武彦さんに『草の花』という代表的作品がありますが、あの時代に生きた青年の心理が見事に描かれています。

さてテーマの「学歴」です。戦時中の「寒雷」には楸邨の選になる「寒雷集」と、自選の「暖響集」という欄があります。俳句結社が持つ永遠の課題と言ってよいと思いますが、主宰者などによる選句の問題です。この選に違和感を感じる者たちは結社誌ではなく同人誌を立ち上げていきます。「寒雷」は楸邨の人柄や考え方から主宰の独善が見られない、結社誌というよりは同人誌に近い俳句誌だと思いますが、創刊同人であった鶴丘が「暖響」に掲載されたのは、本日お配りした「十句選」にも入れましたが昭和 16 年 7 月号の「若葉寒」の 6 句の一回だけだと思います。「暖響集」を見ていくと楸邨は当然として、皆川弓彦、森澄夫、小西甚一、金子兜太、原子公平、沢木欣一、安東次男、など高学歴者が目立つほか、清水清山や本田功という軍人が良く掲載しています。峰岸杜丘や茂木楚水という創刊以来の俳人もよく出ています。何故鶴丘が一回だけなのか、純粋に俳句力の差の問題なのか、そこに学歴とか社会的地位の問題が介在していないかと勘繰ってしまうのです。これはうがった見方で、間違っているかもしれません。ただ、近代の俳句界、殊に「ホトトギス」などが典型ですが中枢部は東大出身者が占めています。逆に伝

統の壁を壊し新しい俳句を求めた俳人たちは富澤赤黄男や高柳重信が早稲田大学、それ以前の「雲母」の飯田蛇笏も早稲田、「石楠」の臼田亜浪は法政など私大系が多い。これは俳句界ばかりでなくあらゆる日本の社会でも同じようではあります。

前項で取り上げた柏原鷹一郎と鎌倉鶴丘にはまとまった句集や著書がなないので、「日本古書通信」に採集できた俳句と、評論・エッセイ類はそのリストを掲載しました。それをコピーして表紙を付けたものを 20 部作り、本日の参加者の整理番号によって渡して頂くようにしました。こうして 20 部くらい配布すると、その何部かは保存されて残っていくからです。そのほか評論、エッセイ類はすべてコピーしてバインダーで綴じたものを数部作り何人かに送りました。正式な本ではないですが、これで何時か二人を研究しようとする人が出た時に少し参考になるかと考えたのです。本日、「日本古書通信」を一部づつ配布しましたが、今年の 6 月号と 7 月号に掲載したものですから、その号が渡った方もいるかと思います。

11 の「通説、偏見の壁」です。高橋鏡太郎は、読まれた方が多いと思いますが、石川桂郎さんの『風狂俳人列伝』や、吉屋信子の『底のぬけた柄杓』、上林暁の『諷詠詩人』で描かれた晩年の醜態ばかりが先行して、かれの残した作品はあまり顧みられていません。これも、今まで取り上げてきた早世俳人と同じように、簡単に作品に触れられないからです。芸術家はその作品によって評価されるべきです。亡くなって半世紀も過ぎたらなおの事です。「汚れた天使」と言いますが、素晴らしい作品をのこした芸術家でありながら、一般的な目で見たら人格的に破綻していたり、周囲に迷惑ばかりかけていた人物は枚挙にいとまがないでしょう。私は今秋 70 歳になりますが、近ごろになって山之口貘や千家元麿のやさしい言葉で表現された詩に強く惹かれるようになりました。難しい表現はしていないのですが奥が深いものを感じます。貘さんの貧乏も有名ですが、元麿の晩年の醜態は鏡太郎に近いものがあります。耕治人さんが『詩人・千家元麿』を著していますが、その醜態を描きながらも愛情が感じられる名作評伝です。

鏡太郎にも高島茂という、酒亭「ぼるが」の主人にして俳人がいて、最後まで支援し、没後はその詩や俳句を冊子に纏めています。ただ極めて少部数で入手が困難なのです。

もう一人の和田久太郎は、大杉栄の同志です。いわゆるアナーキストですが、今年関東大震災の騒然とした中で妻の伊藤野枝、甥の橘宗一と共に虐殺されてから百年ということで様々な顕彰事業が行われていますが、和田は同じく大杉の同志古田大次郎や村木源次郎らと図って、前戒厳司令官福田雅太郎が大杉虐殺を命令したと考え復讐を計画しますが未遂に終わり逮捕されて無期懲役に科せられます。その後大正天皇崩御による恩赦で刑期 20 年に減刑されますが、古田には小坂事件という銀行襲撃事件で行員一人を殺害した前科があり死刑となり、村木は獄中で病死。それを知った和田も獄中で縊死してしまいます。和田はまた結核も患っていました。そういう和田久太郎ですが、かれは少年時代から酔峰という俳号を持つ根っからの俳人でもありました。投獄中の昭和 2 年に『獄窓から』からが刊行され、没後の昭和 5 年には増補の上改造文庫として再刊されます。この獄中記には「鉄窓三昧」「蕗汁」という句集が収められています。その作風は軽妙で諧謔に富み、無期懲役囚の悲壮感は感じられません。当時から未遂事件としてはあまりに重刑だという批判はありましたが、自ら縊死を選ばなければならなかった運命を思わざるを得ません。一昨年、NHK でドラマ「風よあらしよ」という伊藤野枝を描いたドラマが放送されました。村山由佳さんの小説のドラマ化で、後に映画にもリメイクされました。折からの安倍首相暗殺事件で内容的に公開には難しさがあったと想像するのですが、ドラマの中に当然和田や古田と思われる人物が登場しますが、台詞はありませんでした。その後の暗殺未遂事件も描いていませんが、何かを決意する二人の表情が描かれて、分かる人には通じるという映像でした。

未遂にせよ暗殺計画はどんな事情があるにせよ認めることはできませんが、テロリストという色眼鏡を外して和田酔峰の俳句が読まれるとよいなと思います。

12、まとめ

駆け足で 12 名の早世俳人を紹介してきました。お配りしたプリントの中に、「文科」という雑誌に書いた「残してあげたい―早く逝きし俳人たち」があります。今回の講演の依頼を受けた頃に書いたものです。彼らの無念を晴らすべく作品を掘り起こして後世に残して上げたいと、その頃は思っていました。ところが 12 名の調べがほぼ終わった時、彼らは作品がこのように掘り起こされることを望んでいたろうか、死が現実のものとなるなかで彼らが俳句に託したものは誰かに読まれ、後世に名を残すためだったのか、どうもそうではないように思えてきました。「残してあげたい」というのはある意味で、私の思い上がりです。しかし、私は一般の方より、古い俳句資料に出会う機会の多い職業についています。そして不思議なくらいに彼らの作品が目の前に現れてきた。これは彼らと同じく俳句を選んだものとして、彼らの思いを受け止めるべきではないかと思いました。「残してあげたい」ではなく彼らの叫びを素直に聞こうと考えなおしました。

俳句そのものは思想ではありません。表現の手段です。それぞれの生き方や思想、考えは人それぞれです。人間は様々な行動をしますが、無意識で行動するのではなく、言葉で「ご飯を食べている」とか「読書している」とか脳に伝えて行動しています。俳句は咲いた花が美しいと感じた時に、どう美しいのか表現する手段で、言語機能を高度化したものだと私は考えています。だから俳句するとは生きているとほぼ同義なのだと思います。

私は加藤楸邨の『俳句文学全集』で現代俳句に初めて触れたと話しましたが、次に衝撃を受けた句集は、誓子の『激浪』でした。『戦争俳句と俳人たち』で、この句集が刊行されるまでの複雑な経緯を追跡しましたが、それとは別に、この句集は、今日紹介してきた早世俳人たちと同じように、重篤な病に瀕していた俳人が伊勢と言う土地で徐々に回復していく日常を俳句で描いたものです。俳壇からは身を引き静かに己の命を見つめています。俳句に革新を起こそうとかの野心が見えません。そして敗戦から終戦後の復興という日本の状況とも意図せずリンクしたのだと考えます。名句集とは意図してうまれるものではなくそうしたものだと思います。

誓子も早世俳人の一人になっていたかもしれませんが、運命は長寿を与えて俳句文学に大きな足跡を残した。12 名の早世俳人にもそういう可能性があったかどうかは分かりませんが『激浪』に託したと同じ思いで彼らは最後の作品を残したのだと思います。

長い時間のご清聴ありがとうございました。

本島高弓

柏原鷹一郎

（神戸大学注・補遺資料について）
後日樽見講師よりご提供いただいた本島高弓、柏原鷹一郎の写真資料を本原稿に付しています。

早く逝きし俳人たち—人は何故詠おうとするのか（参考文献）

「ホトトギス」昭和 8 年 4 月号、昭和 20 年 12 月号、昭和 21 年 1 月号
「石楠」昭和 10 年 1 月号、昭和 18 年 3 月号
「雲母」　昭和 14 年 3 月号、昭和 19 年 11 月号、昭和 21 年 3 月復刊号
「馬酔木」　昭和 11 年 1 月号、昭和 20 年 1 月号
「俳句研究」　昭和 13 年 11 月号「支那事変三千句」、昭和 14 年 4 月号「新支事変三千句」
「俳句研究」昭和 17 年 9 月号「大東亜戦争俳句集」、昭和 18 年 10 月号「続・大東亜戦争俳句集」
「句と評論」　昭和 8 年 2 月号「笠間新興俳句会」、同 9 月号「田中青牛追悼特集」
「氷原帯」昭和 42 年 7 月号「句と評論・広場」特集号
『河本緑石作品集 1 』,『河本緑石句集』、「ふらここ」1 号
栃木県さくら市ミュージアム展示図録「アザリア」の仲間たち（平成 24 年）
山口誓子著『激浪』（昭和 21 年・青磁社）
加藤楸邨著『火の記憶』（昭和 23 年・七洋社）
樽見博著『戦争俳句と俳人たち』（トランスビュー）『自由律俳句と詩人の俳句』（文学通信）
『現代俳句文学全集』「加藤楸邨集」（昭和 32 年・角川書店刊）
加藤楸邨著『俳句表現の道』（昭和 13 年・交蘭社刊）
高柳克弘著『現代俳句ノート—名句を味わう』（2024 年・ふらんす堂）
俳人片山桃史『北方兵団』（昭和 15 年・三省堂）
平畑静塔句集『月下の俘虜』（昭和 30 年・酩酊社）
島田退蔵古稀記念論文集『島田教授古稀記念国文学論集』掲載金子又兵衛の「中西其十論」（昭和 35 年・関西大学）
『田中青牛遺句集』（昭和 62 年・三元社）
「麦」昭和 22 年 9 月号に「深悼故松本青志氏」
安土利一・松本青志共著『句集青土』（昭和 32 年・麦叢書）
荻原井泉水著『層雲の道』（昭和 30 年・層雲社）「層雲叢書　第一冊」
大橋裸木句集『人間を彫る』『生活を彩る』『四十前後』『海国山国』、編著『鬼貫俳句集』『芭蕉俳句集』『一茶俳句全集』『現代俳句辞典』
『俳句三代集』全九巻別巻一冊その別巻が『自由律俳句集』（昭和 14 年・改造社）
同人誌「アザリア」（盛岡の高等農林学校・宮沢賢治、保阪嘉内、小菅健吉、河本緑石が中心となった）
河本緑石著『大山』（昭和 10 年・河本加寿代）
高柳重信の「続偽前衛派」（「火山系」昭 23・12）「藤田源五郎への手紙」（「俳句世紀」昭 24・１）
遺稿集『驢鳴抄　藤田源五郎遺句集と俳論』（昭和 24 年・藤田仁太郎）
金子兜太著『わが戦後俳句史』（昭和 60 年・岩波新書）
学生俳句連盟機関誌「成層圏」
堀徹遺稿集『俳句と知性』（1962・遺稿刊行会）
高柳重信編集で『昭和俳句選集』（昭和 52 年・永田書房）
「薔薇」本島高弓追悼号（昭和 30 年 8・9 月合併号）
『富澤赤黄男全句集』付録『雄鶏日記』（昭和 51 年・林檎舎）

『俳句界』12 号（昭和 23 年 4 月）「柏原鷹一郎作品集」
昭和 34 年 2 月「寒雷」200 号記念号掲載鎌倉鶴丘追悼記事
高橋鏡太郎著
石川桂郎著『風狂俳人列伝』
吉屋信子著『底のぬけた柄杓』
上林暁著『諷詠詩人』
耕治人著『詩人・千家元麿』
和田久太郎『獄窓から』（昭和 2 年）、昭和 5 年増補の上改造文庫